

第28期 日本語・日本文化研修コース [上級日本語特別コース]

(2008年10月～2009年9月)

初 山 洋 介

第28期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、11カ国、20名（中国：5名 [内2名：香港]、韓国：3名、ベトナム：3名、インドネシア：2名、インド：1名、ウクライナ：1名、スロバキア：1名、スロベニア：1名、チェコ：1名、ポーランド：1名、モンゴル：1名）であり、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習 (10月～4月)

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』(いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会)を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話 (10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

(3) 入門講義・特殊講義 (10月～7月)

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得する

ことを狙いとして、10月～2月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×7回）を行った。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

(5) 発展読解 (10月～4月)

発展読解として、「精読」（教科書の読解教材に代わるもの）、「新聞読解」、「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの）、「本の読解」（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）などを行った。

(6) スピーチ (10月～7月)

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

(7) レポート (1月～7月)

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はA4、15～30枚程度である。なお、今期も、「論文」「調査報告」「随筆」「創作」

という4つのカテゴリーの中から、学生が1つを選んで取り組むこととしたが、最終的に、「論文」を執筆した者が19名、「随筆（紀行文）」を執筆した者が1名であった。研究成果は『2008～2009年度日本語・日本文化研修生 レポート集』（544ページ）として発行した。また、中間発表会（5月、発表：18分／質疑応答：7分）、最終発表会（7月、発表：20分／質疑応答：5分）を実施した。研究レポートの題目は以下の通りである。

①論文

1. 李善英（韓国）「癒しのキャラクター」
2. エンフバヤル・ソロンゴ（モンゴル）「日本における国際結婚」
3. 金珉鎬（韓国）「『竹取物語』における帝と翁の役割－かぐや姫の昇天における帝と翁の位置づけを中心に－」
4. グリシェンコ オリガ（ウクライナ）「『2ちゃんねる』について」
5. 周小寧（中国）「テレビアニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』ヒットの要因分析」
6. 祝世潔（中国）「新聞折り込み広告の中の外来語」
7. シュハダック・ナスルラー（インドネシア）「『とか』。いつ、どんな時に使うのか－意味・用法の観点から－」
8. ステチ・パウリナ（ポーランド）「日本の情報板とそれに表れる道路利用者への態度」
9. 徐慈恵（韓国）「『枕草子』における美意識の一考察－調和・不調和の観点から－」
10. 宋爽（中国）「キャッチコピーにおける表記の観察－「キレイ」を中心に」
11. ダヴィド・フレッシュ（チェコ）「北野武の『暴力映画』」
12. ダム・トゥ・フォン（ベトナム）「日本の公害克服とベトナムへの教訓－水俣病を中心に－」
13. バルタル・トマーシュ（スロバキア）「若者言葉におけるイ形容詞の短縮－未定着語における原則と日本語諸法則のインタラクション－」
14. プイ・ティ・トゥ・トゥイ（ベトナム）「日本マンガの魅力のポイント」
15. ミティア・マルン（スロヴェニア）「第二言語習得とゲーム習得の共通点」
16. ユリア マームダー フィティリア（インドネシ

ア）「日本人の食生活における季節感」

17. 姚安爵（中国香港）「日本におけるカジノ建設の可能性」
 18. 林威（中国香港）「日本のテレビゲーム－面白さの秘密－」
 19. レ・ティ・ハー（ベトナム）「トヨタの企業文化の中核－トヨタ・ウェイと人材育成－」
- ②随筆（紀行文）
20. コラットカル・サンGRAM（インド）「心に残る私の旅」

(8) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞や雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは「日本と東海の食を知ろう、味わおう」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～2週間である。

なお、「日本と東海の食を知ろう、味わおう」については、各自、「総合演習を通して考えたこと」をA4、1枚にまとめ、また、グループ調査に基づき、「新聞」を作成した。これらは、『2008～2009年度日本語・日本文化研修生 レポート集』に掲載した。

(9) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」（20回）を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（4回）を実施した。

(10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会（ディベート）、ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム）なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通じた日本理解」にも参加した。

(11) アンケート

2009年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質

問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	0人	2人	18人

(12) 今期の試みと今後の課題

これまで読解教材の一つとして『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』の「読む練習」の一部を用いてきたが、素材として古くなったと思われ

るものがある。このことに対して、今期は、上記に代わる読解教材を、内容、表現、文体などの観点から検討し、選定・教材化した。ただし、今後もよりよい読解教材を絶えず見出す努力を続けなければならない。また、本コースの場合、年によって、学習者の読解力にかなりの差がある。従って、教材の難易度についても多様なものを用意する必要がある。

さらに、教科書の各課に対応する「復習クイズ」についても、最善のものであるとは言えない。来期以降、よりよいものにしていきたい。